

「カマトカミ」の謎

(ニステカマ と ツクマナへ)

小池正人

一、考察 その一

七代 アマカミのイサナキ・イサナミの 御子 は 一姫三男(ヒヒメミヲ)ワカヒメ、アマテル、ツキヨミ、ソサノヲの 四子です。末子の ソサノヲは 出雲で ヤマタカシラ のオロチと 戦いその縁で イナタヒメと 結ばれ オオヤヒコが 生まれます。その後 オオヤヒメと ツマツヒメの 姫御子と コトヤソも 生まれます。オオヤヒコ

オオヤヒメ

ツマツヒメ

コトヤソ

八代 アマカミとなった 兄 アマテルカミの命で 反乱を起こした ハタレを討つために派遣された イフキトヌシ(兄 ツキヨミの御子)とともに ソサノヲは 戦い 平定に貢献します。

このイサオシ(功績)により 一度は 兄 アマテルカミへの 謀反の疑いにより 追放された ソサノヲは 晴れて 「ヒカハカミ」というヲシテ(称え名)を アマテルカミ(?)より 賜ります。一般的に「氷川神」(ソサノヲの神名)と書かれています。騒動の起こった地が 斐川であったことから理解されています。

この後 クシイナタヒメと の間に 生まれたのが イミナ クシキネの オオナムチ

です。

クシキネ オオナムチ

次に オオトシ クラムスヒ

次は カツラキ ヒコトヌシ

次は スセリメ です。

五男三姫 が ソサノヲの 御子です。(ホ

9-36)

この クラムスヒ の 御子が 後に 「カ
マトカミ」の ヲシテを やはりアマテルカミ
から賜る オキツヒコ です。(つまりソサノ
ヲの孫子) ヲシテを賜る経緯は ホツマ十三
アヤ『ワカヒコイセスカノアヤ』に 書か
れています。

このアヤは 九代アマカミの オシホミミ
に 父親のアマテルカミから 遣わされた
アマノコヤネが (アマテルカミの教えの) イ

セノミチを 伝えることから始まります。イ
セノミチとは 夫婦のあり方役割制度と 考
えられます。

ヨオトニハ ミサホオタテヨ

キモノミハ ヲセノオナカニ (ホ13-14)

オルコトク ナセハミサホソ

良夫には ミサホ(操)を立てることが 妻
が夫の「オナカ」にいるようなことだと 説明
されています。

ヲセノオナカニ

キモアリト ハラアシコトハ

ナカルヘシ ハラヤメルマニ

タエニサトセヨ

(ホ13-19)

夫の「オナカ」に 妻は居るのだと 常にさ
とし 妻の悪口などの「ハラアシコトハ」を
言っではいけない と 説かれています。

この教えの中で オキツヒコが 登場します。

オキツヒコ	ハラアシコトニ (ホ 13-19)
ツマアレテ	ミサホタタヌト
チキリサル	チチウホトシカ
オセミヤニ	ナケケハミウチ
モロメシテ	

オキツヒコが 悪口を発したことで 妻が荒れて操が 立てられないと 契りを破り家を出て行ってしまいます。そこで オキツヒコの父親のオオトシが オセ宮(アマテルカミ)に 嘆きをうったえると アマテルカミは 諸々の関係者 オキツヒコと その妻 父親のオオトシを 集めます。

ウツサルル	マフツノカガミ(ホ 13-20)	ヲセハケカルル
ニステカマ		メハカクサルル

ツクマナへ

アマテルカミが 人のマコトの姿を みる ことができる「マフツノカガミ」で オキツヒコ夫婦の姿を 映すと 夫は 「穢れて煮汚れて捨てられそうな 釜」のように見えて 妻は 「隠されて 中が こげつくままの 鍋」のように 見えるではないですか。

アエミエス	ハチハスカシク	ワカカンハセモ (ホ 13-21)
アメニコフ	ヲセユルサネハ	
イヤハチテ	マカラントキニ	

「ツクマナへ」と言われた妻は 自分の顔を見ることができず この恥をはずかしく思い反省していることを アマテルカミに言上します。

しかしオキツヒコは いったん家を出て行った妻を 許しませんでした。妻は なお一層

恥じて自殺をはかろうとします。

クラムスヒ トトメテシカル (ホ 13-22)

ワカコノミ ニステノツラオ

ミカカセト ヲヤノヲシエニ

オキツヒコ フタタヒトツキ

ムツマシク

この妻の有様を見た 義父の オオトシ
 クラムスヒは自殺を止めて 子のオキツヒコ
 のみを「りつけ」「ニステの面を 磨かなけれ
 ば」と諭します。この真剣な親の教えに よう
 やく反省し 再び 妻と一緒に なって むつ
 まじく暮らすようになりました。

キモセノミチオ (ホ 13-23)

マモリツツ モロクニメクリ

ヨオヲフル ハシメオワリノ

ツツマヤカ

アマテルカミの教えの「キモセノミチ」「イ
 セノミチ」を守りながら 諸国を巡り『ヨオヲ
 フル』（未詳、世を治めることか）つまり世を
 治めて 嫁ぎから死ぬまで 『ツツマヤカ』（夫
 婦仲良くつつましくか？）生活を続けることが
 大事であることです。

フトマニの「ヲナワ」には

ヲノナワノユウハサ (ヲ-30)

ルタノツツマヤカトリ

キニホトオカクルカ

サ ナ ワ

と発言があります。池田先生は解説に『世の
 中を治めるには、その最小単位である一夫婦
 つの円満が基礎であることを重んじ・・・』と
 書かれています。このアヤとの類似が わかり
 ます。

ミチヲシユレハ

ヲランカミ ホメテタマハル

カマトカミ テナヘオサクル (ホ 13-23)

キタナキモ ミカケハヒカル

カミトナル クニモリタミノ

サトシニモ ツクマナサセル

イセノミチ

このオキツヒコ夫婦の再生の経緯から アマテルカミは「カマトカミ」という称え名をオキツヒコに賜ります。一般的には「竈神」と訳されていますが、マフツノカガミに映された夫婦

オキツヒコ 「ニステカマ」 夫

ツマ 「ツクマナヘ」 妻

の「カマ(釜)」と「ナへ(鍋)」から これを煮炊きする一家に 一つあり生活で中心的な役割をもつ「竈」の称号を 送られたと 考えられています。

二、考察 その二

さて、ここで大きな疑問があります。常に深遠なお考えを なさっているアマテルカミが夫婦を 釜と鍋に 例え、家を良く守る人を竈神と称えるでしょうか。「カマトカミ」には別の深遠な意味があるのではないのでしょうか。

平成二十四年に発見された「ミカサフミワカウタノアヤ」には 七代アマカミ イサナキとイサナミのフタカミが 歌われたアワウタの深い意味が 書かれています。

アワノウタ ワレモウタエハ (ワ 127)

モロヒトノ 三オウマントテ

フタソメテ サトシオシエン

二ノミチモ トハネハクモル

アマテルカミのアワウタの解説を聞き 姉のワカヒメが 「ニノミチ」「ニココロ」の重要性を悟り 諸人の心に「ニ」を生じさせるために 札にワカウタを 染めて諭し教えた と書かれています。

「ニ」を 説明することは きわめて難しいですが、夫婦同志、諸人同志を 結びつけるためには 必要な心持なのでしょうか。

ここで ホツマ十三アヤのオキツヒコのことを振り返りますと

「ニステカマ」の「ニ」は 「ミカサフミワカウタノアヤ」の「ニノミチ」「ニココロ」の「ニ」を表わしているように 思えます。つまり

『あなたは「ニ」のこころを捨ててしまった「カマ」(男性、夫のことか)ではないですか』と アマテルカミは オキツヒコに 諭され

たのではないでしようか

ではオキツヒコの妻の「ツクマナへ」はどうでしよう。「ミカサフミワカウタノアヤ」では

アマレルオ	ツキノハシメノ	(ワ)
モチニミツ	メカミノウタハ	
モチノスエ	マケテニヤシノ	
ココロカク	ミツルカクルノ	
フタウタオ	ヒトツレニアム	
ツクハウタ	ツクネオア	ハス

フタカミの 「アメノアワウタ」(ホツマ3-12)は 『ミカサフミアワウタノアヤ』ではヲカミの「五 七 三」の 十五音(ソキノカス)とメカミの「五 七 三」の 三十音 なります。これは 月の満ち欠けを あらわすと書かれています。

イサナキの

ア^ニエヤ ウマシオ^トメ^ニ
ア^イヌ

イサナミの

ワ^ナニヤシ ウマシ^ヲト^コニ
ア^ヒキ

イサナキの十五音のウタは 「ミツル」を
イサナミの十五音のウタは 「カクル」を
表わしていて この二ウタを一連(ヒトツレ)
に編む(このアマテルカミの解説から このウ
タが連歌ツツウタの始まりであると後の世に
伝わったのでしょうか?) ことで

「ツクネ」を 「ア^ハス」となります。

「ミツル」「カクル」「アハス」のコトハの中
音(ヲ、ツホカナメ)をとって 「ツクハウ

タ」と名付られます。(アマテルカミが 名付
けられたのでしょうか?)

「ツク」とは 男女の夫婦が お互いの違
ところを知り、補いあいながら 合わさつて
なりわい(生業)を 行っていく様を 言うの
でしょうか。この「ツク」を「ツクマナへ」の
「ツク」と考えると アマテルカミが オキツ
ヒコの妻に

『あなたは 夫オキツヒコに 今まで操を立
てて従って(カクサルル) きましたが、「ハラ
アシコト」(悪言)に我慢できず家を 出て行
ってしまいました。が、もう一度「ツク」とい
うことを 思い返して学んだらどうですか(マ
ナへ)「ツクを学べ」。』

と諭されているように 思われます。

「ニ」と「ツク」は きわめてよく似た意味

のようです。

さて「ニステカマ」と「ツクマナへ」を右記のように考えると

ヲランカミ	ホメテタマハル(ホ 13-24)
カマトカミ	テナヘオサクル
キタナキモ	ミカケハヒカル
カミトナル	クニモリタミノ
サトシニモ	ツクマナサセル
イセノミチ	

アマテルカミがオキツヒコに 賜った称え名の

「カマトカミ」を再考しますと、オキツヒコと妻が 反省改心し イセノミチを守りながら 諸国を巡り世を 治めたことから、昔 アマテルカミの親である 七代アマカミの イサナキ、イサナミのフタカミが

トハヲシテ	ホコハサカホコ
フタカミハ	コレオモチヒテ
アシハラニ	オノコロオエテ
ココニオリ	ヤヒロノトノト(ホ 23-11)
ナカハシラ	タテテメクレハ
オオヤシマ	トフルマコトノ
トノヲシエ	チキモノアシモ
ミナヌキテ	タトナシタミモ
ニキハエハ	キヤマトトフル
ヤマトクニ	マトノヲシエハ
ノホルヒノ	モトナルユエニ
ヒノモトヤ	

(ホ 23-12)

て クニトコタチから続く「ト」のラシテを用いて

諸国を巡り 低湿地稲作の普及に努められたことがわかります。「マコトノ トノヲシエ」つまり「マト」の考え方を 元に 治世を行われたのです。

このことが オキツヒコとその妻の反省と

改心により フタカミと同じように 「マトノ
ヲシエ」
広められたことを 評価して「カマトカミ」と
称えられたのでは ないでしょうか。

クラムスヒ トトメテシカル (ホ 13-22)

ワカコノミ ニステノツラオ

ミカカセト フヤノヲシエニ

オキツヒコ フタタヒトツキ

ムツマシク

フロンカミ ホメテタマハル (ホ 13-24)

カマトカミ テナヘオサクル

キタナキモ ミカケハヒカル

カミトナル クニモリタミノ

ニステの面を ミカク (磨く) ことにより、

ヒカル (光る) ようになり、反省改心し 「マ

トのヲシエ」を流布し世を治めた功績に 対し

た称え名が 「カ マト カミ」だと 思われ

ます。

「テナヘオサクル キタナキモ」は 「手鍋
提げるような 汚いところも」と 読めますが
反省して 帰ってきた 妻 (テナへ 意味は不
明)を 避けるような汚いココロを持った オ
キツヒコでも 反省しココロを入れ替え 磨
けば カミと呼ばれるようになるのですよ
と 言われていると思われまます。

こうして国を守り、民に諭し、「ツクマナサ
セル」つまり ツクことをまなび行うことが
イセノミチで 重要だと 指導されました。

さてこれの先 ソサノヲが ヤマタカシラ
のオロチを退治し、甥のイフキトヌシと 反乱
軍を平定した時に アマテルカミから賜った
「ヒカハカミ」という 称え名も その前後の
文章を 良く読むと

ソサノヲカ ココロオヨスル
 シムノウタ ミノチリヒレハ
 ガハキエテ タマフヲシテハ
 ヒカハカミ ハタレネオウツ
 イサオシヤ ソコニモトキオ (ホ 9:30)
 ヒラクヘシ

ソサノヲが 晴れて 身のチリをヒレば
 「ガ」ハ 消えたことから(改心して) 「ヒ
 カハカミ」の ヲシテを アマテルカミから
 賜ります。(ガハ が カハ になる) (ホツマ
 9-28)

と理解しますと 「氷川神」本当の 神名の
 意味が わかるように思います。「ヒカワ」で
 はなく「ヒカハ」と ヲシテ表記されています。

スサノヲ 「ヒカハカミ」

孫のオキツヒコ 「カマトカミ」

と ともに アマテルカミの賜るヲシテ称え
 名は表面上の意味のウラに 実に深い意味を
 持ち 送る人に 教諭するために さらに周
 囲の人、後の世の人に 治世の根幹を伝えるた
 めに 良く考えられていることが わかりま
 す。

ホツマ二十二アヤ「オキツヒコヒミツノハラ
 イ」に 再びオキツヒコが 登場します。 治
 世に重要な 祓いを奏上する役割を担ってい
 たことが わかります。このアヤでは オキツ
 ヒコは「ミカマト」と書かれています。「カマ
 トカミ」に 尊称の「ミ」をつけて 「ミカマ
 ト」「ミカマ」と よばれていると 思われて
 きましたが、

クラムスヒ トトメテシカル (ホ 13-22)

ワカコノミ ニステノツラオ

ミカカセト ヲヤノヲシエニ
オキツヒコ フタタヒトツキ

ムツマシク

ヲランカミ ホメテタマハル (ホ 13-24)

カマトカミ テナヘオサクル

キタナキモ ミカケハヒカル

カミトナル クニモリタミノ

と 「ミカカセト」「ミカケハ」と 「カマ
トカミ」の 別の称え名として 「ミカマト」
が 考えられます。

以上 「カマトカミ」「ミカマト」のオキツ
ヒコは 治世の重要な役割を担う重臣と な
ります。ホツマ二十二アヤは 再度読み返すの
は 後稿にゆずりたいと思います。

こうして感じるのはいかにアマテルカミ
が 世のためにラシテを 深めていかれてい

たか いかにお偉かったかと いうことです。

ナソシリソ モモチココロミ (ホ 40-97)

ハルカナル オクノカミチエ

マサニイルヘシ

(未完)

平成二十九年一月一日

(参考文献)

『ホツマ辞典』 池田 満著

『定本ホツマツタエ』 池田 満著

『ミカサフミ・フトマニ』 池田 満著

『ホツマツタエを読み解く』 池田 満著

『ホツマで読む ヤマトタケ物語』 池田 満著

『よみがえる縄文時代』

イサナギ・イサナミのこころ

(ミカサフミワカウタノアヤ) 池田 満著

